

講演Ⅱ 西谷の外国における評価について

J・ハイジック

はじめに

一、このリストは完全ではない。最近の十年の間に出版された諸宗教間の対話についての神学の本の多数にまき散らされた言及がある。Bowers (1)の文献を参考。

二、「西洋」というよりも、「日本以外の学者が西洋の言葉で書いた」ものを対象にした。実際、私が用意したリストには Lin Chen-Kuo (22)が唯一の西洋人でない学者であるが、アメリカで勉強している若い韓国人の中で、教と学派の研究をしている人もいるので、将来、それらの書物をリストアップできるかもしれない。

主要な研究

三、私が知っている限り、翻訳以外の西谷の主な著作に基づく論文はまだ存在しない。Waldentalsの本(3)やその他の論文ももっぱら英語の翻訳のみを使用している。それは西

洋における西田の研究とは違います。

四、英語でされた主要な研究としては、Russell H Bowers (1)しかない。未刊の主要な研究の間で、二つの博士論文を見つけた。Krebs (49)は『宗教とは何か』の最初の英訳の一部のみを使用している。Kristiansen (50)は『宗教とは何か』の全訳を徹底的に読んだ上で、神と空に焦点を集める論文です。

五、Bowersの本は Dallas Theological Seminaryの博士論文そのものである。著者の立場はどちらかというと「原理主義的」とか「福音主義的」なのであって、キリストが全て無か、というようなキリスト教本流の態度である。とはいうものの、物理主義、ニヒリズム、無神論的な実存主義に対する西谷の批判を共通の広場とするが、Bowers自身にとつて明瞭な真実を否定する西谷の「非人格的な神概念」は最終的な対話への障害となる。本書は哲学的に弱い、ともかく西谷の声がアメリカの一番保守的な皆の中

でこたますること十分な貢献だと思われる。

全体的な印象

六、西谷自身は哲学者との対話を熱心に期待したにもかかわらず、彼の思想に対する哲学的な反応は、今まで極めて少数しかなかった。つまり、西谷のアリストテレスやデカルトの批判、また彼のハイデッカー思想との取り組みはほとんど欠けている。

七、むしろ西谷の思想に対する関心はまず二つのグループの間で注意を引き付けた。(1) 仏教との対話を求めるキリスト教徒と(2) 西洋の哲学の教育を受けて、仏教に興味を持っている学者。

仏教との対話を求めるキリスト教徒

八、キリスト教徒の神学者の間で、カトリックの学者は早い段階から最も大きい興味をもった。これは、西洋においてカトリックが一般に対話でリードをとっている事実と関係があるかもしれない。その興味は現在、キリスト教の神学世界一般まで広がってきた。

九、キリスト教の利害関係は主に神とキリストとの関係に焦点を合わせる。これは二〇世紀の後半の中心的な神学の問題であったし、西谷の *Kenosisis* 論は人格性を超える神概念として大きな注目を呼んだに違いない。これと関連して、

阿部正雄先生が長年、西谷のキリスト論を多くの西洋人に紹介したことは、重要な役割を果たした。

一〇、もう一つの関心の理由は、今世紀においてキリスト教の「神秘主義」や「宗教体験」への関心にある。これと関連して西谷のエクハルトに対する興味は重要である。上田閑照のドイツ語と英語の論文も西谷の思想に注目を呼んだ。しかし、残念ながら、エクハルトの原文にこだわる神秘主義の専門家は、今まで大体の西谷の解釈を無視してきた。

一一、もう一点。西谷の思想が西洋に紹介された時は、「神の死」の神学者 Alizer ともつれられていた。それは仏教の「無神論」や Alizer 自身の西谷への興味である。『宗教とは何か』の最初の書評を出版したのは Alizer であった。彼の哲学的立場は西谷のとずいぶん異なっていた (Alizer は主にヘーゲル思想に基づくが)、結局彼は、西谷の思想との取り組みを早く止めた。

西洋の哲学の教育を受けて、仏教に興味を持っている学者

一二、西谷思想に対する一般の哲学的な無関心の中で最も例外的なのは『ニヒリズム』の英訳の受け止めであった。訳者 Gahan Parks はニーチェの関心から西谷に目を注いだ。その結果、一般のニーチェ学者はもはや西谷の貢献を無視することはできないとおもおうが、哲学的なレスポンス・プロパーはまだまだです。

一三、私個人としては来年の春の *The Journal of Religion* に出る論文の中で西谷のデカルトの「自我」の理解を問うこともある。

一四、西谷思想に興味を持ってきたハイデッガーの学者は、仏教を研究している宗教哲学者に制限されているというのは過言ではない。それらの若い学者は、西洋の哲学の本流からかなり離れたところで自分なりの専門を定義しようとしている。たとえば、S.Heine, S.Odin, D.Shaner は代表的である。

一五、総じて、西谷の本はハイデッガー風な哲学論文として受け止められてきた。ハイデッガーの *Sein und Zeit* が神学セミから生じた本であるに関連して、かれの二〇世紀の神学への影響は強いが、西谷の主な影響も宗教界に対してであるとは驚くべきではない。しかし宗教以外の分野——解釈学、脱構築論、美術学、言語学など——への影響はハイデッガーとくらべて西谷の場合はほとんどなかった。

仏教学と国家主義

一六、仏教学者の中で、数少ないもう一つのグループがある。それらは西谷の著作を表面的にしか読んでいないかも知れないが、日本の精神史からみて、京都学派のいわゆる「国家主義」とか「全体主義」の維持を論じて、西洋の宗教界の西谷思想への関心を批判することになった。

一七、京都学派と国家主義をめぐる論争は、どこから始まったかという点、二つの源泉がある。第一には、西洋の歴史家が二〇年あまり前から日本の歴史家を徹底的に、しかも原文から読み、左翼の精神史とその戦争批判に注目を与えた。第二には、京都学派の書物が十年ちょっと前から次から次へと英訳に出て、宗教界の関心を引き止めた。そしてその二つの方向を衝突させたのは、何よりもハイデッガーのナチ関係の発見であった。

一八、Kyoto Zen Symposium から生まれた *Rude Awakenings* はそのぶつかり合いの結果の一つであるといえるだろう。私個人としては、『中央公論』の座談会の中の西谷のコメントを全て英訳したが、それはまだ未刊である。あちこちから出版するように頼まれてきたが、考えております。とにかく、これからの外国の京都学派を研究するものは、西谷の著作の原文のみならず、現代日本の精神史や日本における京都学派に対する批判も原文で読まないと歴史的な判断はできない、ということには西洋に常識となってきた。

未探検の領域

一九、深層心理学に対する哲学上の反応は西洋においては半世紀あまり前からですが、その学者はまだ西谷と取り組んだことがないし、西谷の思想を研究する外国人はまだその側面に十分注目をしていない。

二〇、西田思想とWhitehead哲学との比較研究はかなり前からあったが、自然や科学に深い関心を持った西谷とホワイトヘッド哲学とのつながりは十分研究されていない。また、『過程と現実』のまともに書いてあるWhiteheadの神概念と西谷の神概念との比較は示唆的な研究になりうるかもしれない。

二一、脱構築の立場からの西谷批判は日本以外においては、まだです。

注目を終える

二二、George Batailleがニーチェについて「ニーチェの思想を特定な方向づけから使用することはまず不可能といわなければならないであろう。」という。なぜなら、ニーチェはすべての方向、すべての視野や立場を徹底的に批判するからである。西洋の西谷の受け止めからみて、ある意味で、西谷の「空の立場」も同じである。つまり、批判的な役割以外は、積極的な刺激は少ない。外国においては、西谷の著作を文献的に、あるいは論理的に批判する学者が少ない理由は、翻訳の少なさだけではない。彼の「東洋人としての」哲学のスタイルはこう言ったような批判を刺激しないからである。西谷自身にとっては、これは理想的でなかったに違いない。しかしこの欠点を克服するために、京都学派を研究する若い日本人の学者との交流は必然的である。

竹村牧男 著

『唯識の構造』

『唯識の探求』

——唯識三十頌を読む——

以上、春秋社

『知の体系』

——迷いを超える唯識のメカニズム——

佼成出版社

『「覚り」と「空」』

講談社現代新書